



生命医科学部

野口範子 先生

SC副専攻設立

酸化ストレス

サイエンス・ナウ3

質問 01/04

なぜいま、サイエンスコミュニケーターが必要だと考えるのか？

科学・技術の発展は目覚ましく、その恩恵を受けて私たちの生活は便利で快適になりました。優れた薬の開発や医療技術の発達には長寿を実現しました。その一方で、科学・技術の高度化・細分化が急速に進み、わかりにくくなっていることも事実です。このような状況であるからこそ、**誰もが、科学的根拠に基づいて判断する能力、つまり科学リテラシーをもつことが重要になります**。社会の隅々に科学リテラシーを行き渡らせる役割を担う人のことを、「サイエンスコミュニケーター」と呼びます。**サイエンスコミュニケーターは、科学・技術について、正確にわかりやすく説明する必要があります**。例えば、東日本大震災の原発事故やCOVID-19のようなパンデミックが起きた時に、その重要性がクローズアップされますが、平常時においても、科学と社会の架け橋になるサイエンスコミュニケーターはこれからますます求められると考えています。

質問 02/04

東大、北大、早稲田のSC養成副専攻と比較した同志社ならではの独自性

2005年に振興調整費という国の支援を受けて、3つの大学でサイエンスコミュニケーターを養成する教育プログラムが立ち上がりました。それぞれが目指したのは、科学技術ジャーナリスト養成(早稲田大学)、科学技術コミュニケーター養成(北海道大学)、科学技術インタープリター養成(東京大学)です。全て大学院生を対象としていました。早稲田大学のプログラムは2008年から大学院政治学研究科「ジャーナリズムコース」に統合されています。北大は2010年4月から、オープンエデュケーションセンターに設置されている科学技術コミュニケーション教育研究部門(CoSTEP)が後継組織となり、大学院科学コミュニケーション講座を開設し、社会人にも広く開講しています。東大のプログラムは、博士前期後期課程の研究科に股がる副専攻で、約12の開講科目と論文指導があります。履修生は毎年10名程度でしたが、2012年からは学部3、4年生にも開講し、約20名が選択科目として自由に履修しているそうです。本学の全学共通教養教育科目のようなイメージかと思われます。

同志社大学のサイエンスコミュニケーター養成副専攻(SC養成副専攻)は、2016年度に学部生を対象に開設されました。学部の早い時期(2年次から履修可)から履修できる点が特徴の一つです。本学のSC養成副専攻には、講義科目11科目に加えて、サイエンスライティングやアウトリーチなど演習を伴う科目、さらに、ビジネスワークショップ(企業、テレビ局、新聞社を訪問)とメディカルワークショップ(重度心身障害病棟、感染症専門病棟、医療少年院、障害者就労支援施設を訪問)があり、合計16科目が副専攻専用科目として開設されています。さらに、文部科学省選定事業として、取材・撮影・編集作業を行い、科学・技術をわかりやすく紹介する動画作成に取り組む「未知型探索ワークショップ」も新たに開設されました。大学教員だけでなく、様々な分野のプロフェッショナルから現場指導を受けることができることも本学SC養成副専攻の特徴です。

質問 03/04

副専攻を通じて身に着けてほしい力

現在、本学のSC養成副専攻は、生命医科学部、経済学部、社会学部、文学部、法学部の5学部体制で、定員約50名として運用しています。様々な背景をもつ人の考えを理解し、科学・技術について、そして社会との関係について説明できる人になって欲しいと思っています。SC養成副専攻で学ぶことによって、科学知識に加えて次のことが身につきます。ただし、どのくらい積極的に取り組むかによって身につく力は違います。

- 1) 基礎から応用への学び(創造力、発信力)
- 2) 他分野の学生と共に学ぶ(理解力、説明力、調整力)
- 3) 協同作業により成果物を作る(発想力、企画力、忍耐力)
- 4) 多彩なワークショップで早く現場を知る(将来のキャリア選択力)

質問 04/04

履修を検討している学生にメッセージ

SC養成副専攻を履修すると、所属する学部の主専攻では学ぶことができない知識や能力が身につきます。これまでに履修した先輩たちの成長には目に見張るものがあります。今後さらに複雑さを増す科学と社会の架け橋になる人「サイエンスコミュニケーター」を目指す人を待っています。